



TITLE:

萍瀏醴における革命蜂起について：  
洪江會を中心として

AUTHOR(S):

清水, 稔

---

CITATION:

清水, 稔. 萍瀏醴における革命蜂起について：洪江會を中心として. 東洋史研究 1971, 29(4): 410-433

ISSUE DATE:

1971-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152825>

RIGHT:

# 萍瀏醴における革命蜂起について

—— 洪江會を中心として ——

清 水 稔

は し が き

一 蜂起の背景

二 洪 江 會

(1) 洪江會の成立過程

(2) 洪江會の構成要素

三 萍瀏醴における革命蜂起

(1) 蜂起の前夜

(2) 蜂起の展開とその敗北

むすびにかえて

は し が き

「萍瀏醴における革命蜂起」、それは、一九〇六年（光緒三十二年）十二月四日から一ヶ月にわたって、哥老會系の「洪江會」に屬する會黨・農民・勞働者・兵士たち約三萬人が、滿洲王朝打倒のため、江西・湖南の交界地域、すなわち、萍郷・瀏陽・醴陵など數縣で蜂起した革命運動である。

會黨首領龔春臺を指導者とし、下層の民衆を主體とするこの蜂起は、中國革命同盟會の政策を掲げて戦い、不充分なが

らも清朝支配を打ち破らんとする方向性を示しているかにみえる。特に、この蜂起に参加した農民大衆、とりわけ會黨が示した戦闘力は、同盟會をして清朝打倒を現實的なものとして受けとめさせた。したがって、この蜂起は、單なる一地域の蜂起ではなく、辛亥革命にむけての歴史的課題を擔ったものであった。

この蜂起は、同盟會成立後における最初の武裝蜂起として注目されているが、その経過内容に論及したものは、中村義氏の「辛亥革命の諸前提<sup>(1)</sup>」があるにすぎない。

中村氏の論文は、主として、湖南における革命勢力の伸長にスポットをあてながら、辛亥革命がブルジョワ革命であり、それを擔ったのはブルジョワジーでなければならぬとして、中國内部における民族ブルジョワジーの活動を追踪し、その政治結社である同盟會の役割を非常に高く評價する。この評價のもとに、同盟會は、滿洲王朝打倒にむかつて、「萍瀏醴の革命蜂起」に参加した會黨・農民大衆と密接な關係を持ち、また、その後も、同盟會は、農民の要求を生るのまに吸収する會黨と密接に結びつき、湖南に革命の據點をつくっていったと指摘する。

同盟會の成立は、中國の革命運動において、まさに劃期的なことではあったが、果してどこまで會黨・農民大衆を把握できたであろうか。その實體がどうであったかは、その後の同盟會による武裝蜂起が相次いで失敗に終わったことにみることができる。それを萍瀏醴の革命蜂起からみると、同盟會は、會黨首領層との同盟には成功したが、會黨首領下の農民大衆を直接把握することができなかった。つまり、同盟會は、會黨首領に働きかけ、農民大衆のエネルギーを蜂起に驅り立てる端緒をつくりはしたが、彼らを直接組織することができなかった。むしろ、革命派の影響を受けた「革命的會黨首領（後述）」が、農民大衆の直接の組織者として機能した。したがって、中村氏の、いわゆる、同盟會の指導による萍瀏醴の革命蜂起が、同盟會と農民大衆の同盟を生み出したという歸結は安易すぎやしないだろうか。もし、同盟會と農民大衆が密接に「指導と同盟」の關係におかれていたとするなら、二千年來の専制支配を打倒した辛亥革命の成果が、半年もたたないうちに、袁世凱の軍閥政權に奪われる結果を招きはしなかったであろう。

中村氏の述べるように、辛亥革命およびその前史において、同盟會はブルジョワ革命思想の宣傳者として重要な役割を果たした。しかし、それが強調されすぎるあまり、廣大な農村を基礎とする農民大衆の革命的行動が、ややもすれば歴史の後景におしやられるか、また、その役割が見落されがちである。少なくとも、長い王朝專制支配にピリオドを打った革命の勝利に至る道を理解するに際し、農民大衆独自の反封建闘争、および、會黨の戦闘的な行動の側面に、充分な力點がおかれなければならないと考える。

小論の目的は、一つには、萍瀏醴における革命蜂起の社會的背景を明らかにすること、二つには、蜂起の全貌および中村氏が論及されなかった「洪江會」の活動を明らかにすること、三つには、この蜂起を、中村氏の、いわゆる、同盟會による「指導と同盟」論から把握するのではなく、同盟會の活動を補う役割を果たした會黨（洪江會）の活動にスポットをあてながら把握することにあるが、その意圖は、義和團運動から辛亥革命に至る間の民衆運動を明らかにすること、この運動を通じて、清朝專制支配を打ち破るものが、眞に何であったのかを追求することにある。

## 一 蜂 起 の 背 景

一九〇六（光緒三十二）年、湖南・江西一帯は大水害をもつて明けた。新民叢報はその模様を次のように報じた。「降り續く雨と河川の氾濫によって、住民の生命・財産は洗ひ流され、水面が數百里にわたつて果しなく廣がり、田地・墓地・家屋は跡形もなくなった。……死者は三、四萬人……避難民は三、四十萬人に及び、泣聲が地を震わせた。思うに、この奇災は湖南省二百餘年の間いまだかつてなかったことである」と。光緒東華錄・時報などの記載によれば、この年の自然災害は、湖南・江西だけではなく、江蘇・江南・山東など中國全域にわたるものであり、また、それは、一九〇〇（光緒二十六）年以來慢性化した自然災害の一部でもあった。これは、ただちに穀物價格の高騰と大飢饉をもたらした。長沙・平江などの鄉村では、飢民が巷にあふれ、富豪・小康の家が急襲され、穀物が強奪される事件が頻發し、暴動寸前の状

況を呈したといふ。<sup>(5)</sup>

連年にわたる天災が、湖南農村の荒廢と農民の貧窮化を招いたことは確かであるが、これを生みだし、これを促進し強化させた基本的な要因が他にあった。それは、帝國主義諸列強の賠償金・開港などによる侵略的な政策と、「洋人の朝廷」<sup>(6)</sup>と化した清朝政府の新政によるものであった。

一九〇一（光緒二十七年）年、義和團運動は、清朝政府と帝國主義諸列強の手によって鎮壓され、兩者の間に辛丑條約が締結された。その後、諸列強は、この條約を直接の足がかりに、また、清朝政府を「かくれみの」にして、中國の半植民地化を強力に推進した。

とりわけ、賠償金返済の重壓は大きかった。四億五千萬兩（三九ヶ年分割拂い、年四％の利息を含めれば約九億八千萬兩）<sup>(8)</sup>にのぼる多額の賠償金を背負わされた清朝政府は、この支拂いを各省に分擔させたが、湖南でも毎年の分擔金が七〇萬兩、江西では一四〇萬兩であった。<sup>(9)</sup>その他、各地の教會破壊などに伴う地方賠償金があり、その額は、湖南では三六萬兩、江西では七〇萬兩にのぼった。<sup>(10)</sup>賠償金の分擔を背負わされた各省は、その費用を民衆に轉嫁し、糧稅・鹽斤加稅・釐金・家屋稅・印花稅・烟稅・酒稅・肉稅・賭博稅・店舖稅・審稅など舊稅の強化・新稅の設置によって捻出した。清朝政府による民衆への課稅強化は、ただ單に賠償金返済のためのみならず、清朝政府自らが、列強と密接な關連において國內支配を保持し續けるためにやらざるをえない政治的改革、すなわち、「新政」の財源を確保するためのものでもあった。それゆえ、民衆はなお一層苛酷な生活條件の下におかれた。清朝政府も、その苛酷さを認めて、次のように述べている。「近年以來、民力はすでに凋敝を極めてゐるのに、さらに、賠償金の各省分擔によってますます疲弊する。肉を剝りて瘡を補うように、民衆の生活は日に日に苦しくなつてゐる。……聞くところによると、各省の督撫は、新政を舉辦するためいろいろな金の工面をしているが、それは、ほとんど池を乾して魚をとるのと同じである」と。<sup>(11)</sup>

一方、列強による開港は、一九一一（宣統三）年までに八二を數えた。<sup>(12)</sup>その開港は、一九世紀末から二〇世紀初頭にか

けて、列強の對中國貿易を急速に伸展させたが、同時に、中國にたえず多額の輸入超過をもたらした。中國の輸出品では、茶・絹・綿花・落花生・大豆など農産物原料の占める率が高く、輸入品では、綿布・綿糸・砂糖・石油・染料など直接消費資料が大半を占めた。こうした傾向は湖南にもみられた。すでに、一八九八（光緒二十四）年に岳州が開港され、義和團運動以後、湘江に沿って、一九〇四（光緒三十）年に長沙が、一九〇五（光緒三十一年）年には湘潭が開港された。特に、長沙の開港によって、列強の對中國貿易は一段と伸長した。帝國主義諸列強のうち、日本とイギリスが省都長沙をその牙城にして、湖南への經濟的侵略を進めていった。それに伴い、外國の商品は、商埠地のみならず、その周邊農村へ、さらに、鐵道を通じて内陸奥深く流入していった。一九〇五（光緒三十一年）年の長沙では「舶來小間物を賣る大店二十餘軒あり」といい、萍鄉では「舶來品の店が縣城最大の店舗となり、洋布・洋油・洋釘などの商品が鄉村に賣りさばかれ、一般の手工業者に重大な脅威を與えた」という。帝國主義による安價な商品の販賣と原料の調達は、中國の傳統的な副業的家内工業に打撃を與えたが、その姿を醴陵の陶磁器産業にみることができる。

陶磁器は、麻布・爆竹・藥材とならんで、醴陵の特産品であり、重要な縣外移出品であった。この陶磁器生産は、清の雍正年間、瀉山を中心にはじまり、まもなく隆盛をむかえた。その生産は、主として三つの工程（土磁業者による原料處理、客戸による轆轤作業と焼成、繪付け作業）から成り、各々獨立した企業として存在した。客戸の下にいる職人は熟練を要したが、他は農民の副業として行なわれ、完成した製品は、特權を有する客商（江西商人）にゆだねられて流通機構に投ぜられたという。一九〇五（光緒三十一年）になると、醴陵の陶磁器業界は不振をきわめ、熊希齡によって、新式の機械と技術の導入による陶磁器工場設置の構想が打ちだされるほどであった。その不振の背景には、年ごとに増加する日本の安價な陶磁器製品の流入にあった。その様子について、熊希齡自らも「その販路極めて廣く、そのために景德鎮の陶磁器の利益すらも、それに奪われてしまった」と報告している。こうした理由の他に、技術的な未熟さや立地條件の悪さからくるコスト高のために、醴陵陶磁器の販路が絶たれたこと、多くの客戸が、災害の連續・收奪の強化によって、資金

繰りに苦しみ、倒産の危機に瀕していたことなどがあげられる。陶磁器業の不振は、醴陵の農民の副業を奪い去り、彼らの重要な現金収入の道を閉じた。

清末のこうした社會條件の下で、湖南の農村は荒廢し、農民大衆の「匪化」が促進され、一方では、この地域の會黨集團「洪江會」が彼らを吸収しながら、その勢力を増大させていった。醴陵知縣は、その模様を次のように述べている。

「春夏の災害によって、農民たちは、食うに困り果てたあげく、徒黨を組んで盗みを働き、また、會匪は、その隙を利用して農民を煽惑し、彼らを仲間ひき入れている。十人のうち九人までがそうであり、その情勢は憂慮に堪えないのである」と。こうして、萍瀏醴における革命蜂起の前提が準備されたのである。

## 二 洪 江 會

### (1) 洪江會の成立過程

洪江會は、一九〇六（光緒三十二年）年、萍鄉・瀏陽・醴陵において、革命派の影響下に成立した會黨の聯合機關である。洪江會は、「洪江會匪」といわれたところからわかるように、その實體は、哥老會の流れを組む會黨であるが、實は、後に述べるように、それ以外の雑多な要素を含み込んだ集團であった。以下において、洪江會の成立過程をたどってみよう。

洪江會の成立は、湖南など揚子江流域に勢力をもつ會黨「哥老會」の活動と密接な關係にあった。特に、一八七〇年（八〇年代）の湖南省では、「哥老會のない縣はほとんどない」とか、「貧民の會匪に流れる者十のうち五、六である」とか、また、「軍隊が往けば散じ」、「平日は郷里に潜踪し、平人と異なるところが無い」とかいわれるように、哥老會は、湖南の郷村に深くその根を下していた。

ところで、哥老會は、乾隆・嘉慶年間、四川・湖南地方に生まれたが、それが結社として結實したのは、太平天國運動

による激動期である。その勢力が次第に揚子江流域の開港諸都市に廣がり、反體制的な社會集團として注目されはじめたのは、一八九〇年代である。哥老會のこうした飛躍的發展の因をなしたものは、一つには、湘軍・淮軍などの軍隊が解散されて、生活の手段を失った兵勇が大量に生みだされたことにあるが、湖南だけでもその数は數十萬に達したという。二つには、帝國主義諸列強による開港の結果、上海・漢口などで商品の取引きが直接行なわれ、廣東から湘潭に至る内陸交通路や、揚子江中下流域および沿海・運河などの水上交通路で働く數十萬、百萬にも及ぶ交通輸送の勞働者が失業したと、三つには、太平天國が鎮壓された後、諸列強による半植民地化と清朝支配體制の再編成の進行および慢性的自然災害によって、農村の荒廢が進み、多量の失業農民が生みだされたことにある。こうして析出された「無家可歸」「無業可食」の民衆の多くは、哥老會に生存の道を見出して入會し、そこで、「打富濟貧」をスローガンに掲げて、生きるための闘いを展開した。湖南では、一八七〇年代に二十數件に及ぶ哥老會の反亂があった。その反亂の地域は、主として湘軍などを大量に募集した湘鄉・湘潭・衡山から寶慶・瀏陽に及ぶ湘江中流域の鄉村であったこと、また、哥老會が湖南から揚子江流域に發展した經路の一つに、湖南省境から江西を経て九江に至るものがあつたとの指摘は、萍鄉・瀏陽・醴陵地域が、哥老會勢力の根強い地盤であつたことを物語るものといえる。

このような活發な行動を展開してきた湖南の哥老會を、一九〇〇年代になって積極的に革命運動に組織したのは、湖南の革命家黃興であつた。これより先、湖南の哥老會は、廣東の革命結社興中會と交流したり、唐才常の自立軍蜂起に参加したことがあるだけに、黃興の呼びかけに應ずる素地は充分に存在していた。一九〇四（光緒三十）年二月、黃興・劉揆一・陳天華らは、湖南における革命派最初の政治結社華興會を設立して、學生らのインテリゲンチヤを革命に組織する一方、下層民である會黨だけを組織する機關として、別に同仇會をつくつた。まもなく哥老會の大首領馬福益が同仇會の要職にむかえられたことによって、會黨の結集は一段と進んだ。「湖北革命知之錄」によると、同仇會に加入した會黨の数は十萬人を下らなかつたという。まさに當時の華興會は、會黨と密接な關係をもつた革命團體であつたといえよう。こ



うした力を背景に、華興會と同仇會は、一九〇四（光緒三十）年十一月十六日の西太后七十歳誕生祝賀日に一齊に蜂起し、長沙省城を占領して革命の據點とする計畫をたてた。しかし、蜂起直前に事が漏れ、哥老會の馬福益は捕えられて殺害され、同仇會およびそれに結集していた會黨集團は瓦解した（長沙蜂起<sup>(4)</sup>）。

ところで、長沙蜂起の失敗によって、華興會首腦は日本に亡命した。當時、東京には、華興會の他、興中會・光復會の首腦も、清朝の彈壓をのがれて亡命していた。彼らは、期せずして日本で接觸する機會をえ、ロシアの血の日曜日事件や日露戦争における日本の勝利を轉機に、各革命結社の統一を畫策し、一九〇五（光緒三十一年）年八月二十日、東京で中國革命同盟會を結成した。孤立分散的な各革命結社が一つにまとめられたことは、滿洲王朝打倒の革命運動をより現實的なものとした。

一九〇六（光緒三十二年）年春、同盟會會員で湖南出身の留日學生劉道一・蔡紹南は、革命工作活動のために故郷湖南にもどってきた<sup>(4)</sup>。彼らは、ただちに長沙で革命黨員數十名と會合、長沙省城を奪取して、湖南に革命の根據地をつくる計畫をたてた。そのために、まず長沙周邊の軍隊・會黨に充分な働きかけと軍事訓練を行ない、彼らをベースに舊曆十二月末を期して蜂起することにした<sup>(4)</sup>。この蜂起計畫にもとづき、各黨員は、それぞれの任務を帯びて地方に潛入した。劉道一は、長沙に残って蜂起全體の責任を負い、蔡紹南は、醴陵・瀏陽・萍鄉で革命宣傳と會黨の組織工作に従事した<sup>(4)</sup>。これが萍瀏體における革命蜂起の發端となった。

蔡紹南の會黨工作は、彼の同胞で會黨に顔見知りをもつ、萍鄉縣上栗出身の學生魏宗銓<sup>(4)</sup>とともに行なわれた。當時の萍鄉・瀏陽・醴陵には、後に述べるように、哥老會系の會黨集團がいくつも存在していた。特に、上栗はそれらのたまり場であった<sup>(4)</sup>。そこで、魏宗銓は、上栗に全勝紙筆店を開き、ここを據點に會黨の組織化をはかった。その結果、蔡紹南らの革命派は、會黨首領龔春臺・李金奇・沈益古ら多數と誼を通ずることができた。

一方、哥老會の大首領馬福益が殺害された事件は、彼を慕い、彼の下に集まっていた多くの會黨を激怒させ、各地に

「復仇」の聲を高まらせた。その結果、彼の死によって、一時、四分五裂の状態となっていた會黨集團の中に、復仇をめざして、再び結集する動きがおこった。それは、蔡紹南らの革命派による會黨結集工作にとって、まさに好都合であった。こうして、會黨首領と革命派の連合はその緒についた。

蔡紹南・魏宗銓および會黨首領龔春臺らは、各地の會黨首領百餘名を萍鄉縣蕉園に集め、蜂起を實行する機關の結成について協議した。<sup>(4)</sup> 彼らは、その席で「滅滿興漢」を目ざす會黨の連合組織、すなわち、「洪江會」の設立を宣言し、互いに同盟を死守することを誓い合い、その最高指令官に瀏陽哥老會首領龔春臺を任命した。洪江會は、その會内に、最高議決機關として忠孝仁義堂、執行機關として内八堂（文案・錢庫・總管・訓練・執法・交通・武庫・巡查）と外八堂（第一第八方面指揮官（碼頭官）を設けた。<sup>(4)</sup> また、鄉村の區割りを基礎に、十人、百人、千人單位で部隊が編成され、それぞれに什長、百總、千總が置かれた。各方面指揮官は千總の上に位し、それには有力な會黨首領があてられた。<sup>(4)</sup> その他、總本部を廬石（萍・瀏・醴三縣交界の地）に置き、上栗の全勝紙筆店を會友の會合・資金工作の場とした。こうして、洪江會は、革命派の影響を受けながら、萍鄉・瀏陽・醴陵の會黨地盤を背景にして成立したのである。

## (2) 洪江會の構成要素

まず、その構造からみよう。洪江會のあり方について、次のように記されている。萍鄉の洪江會に結集した萬餘人のうち、「半ばは本地の會黨であり、半ばは各地の流民である」と。<sup>(4)</sup> また、龔春臺の蜂起軍が上栗を占領すると、近隣の「百姓」や鎮壓にむかった「兵士」が、紛々と龔軍に投降し、瓦解すると、彼らもまた、逃散したと。<sup>(4)</sup> つまり、洪江會は基本部隊を核とし、これに各層の民衆が各地から加わることによって成り立っていた。そのうち、基本部隊の中心は、萍鄉・瀏陽・醴陵一帶の會黨である。鄭永成の回憶によると、當時、この地域には、龔春臺（瀏陽）・李金奇（醴陵）・蕭克昌（萍鄉）を首領とする哥老會、姜守旦（瀏陽）を首領とする洪福會、龍人傑・饒有壽・沈益古・廖叔保（以上萍鄉）を首

領とする武教師會などの會黨集團が存在していた。それらは、それぞれ數百人から千餘人を擁し、湖南・江西の省境の山寨を據點に活動していた。また、これらの會黨集團は、哥老會大首領馬福益の生前中、彼の薰陶を受けて哥老會に歸屬し、自立軍蜂起・長沙蜂起に参加した經驗をもっている。

ここで會黨集團における二、三の首領の生いたちをたどってみよう。瀏陽の姜守旦は、萬鵬飛とも、歐陽篤初ともいわれる。貧農の家に生まれ、父の死とともに各地を流浪して哥老會にはいり、のち瀏陽に自立して洪福會をつくり、その首領となった。安源の蕭克昌は、安源炭鑛に勢力地盤をもち、かつて馬福益の腹心として活動した。兩江總督端方の報告によると、彼は、安源の炭鑛労働者六千人をその翼下に収めていたという。彼がどのような生いたちをたどったかは不明であるが、炭鑛労働者であったことから、おおよそ、貧農↓流浪↓哥老會の系譜をたどったことは推量できる。こうした首領の生いたちの中に、會黨集團の縮圖をみることができる。會黨集團の構成者は、既成の社會秩序から疎外された最下層の民衆であり、彼らは、一般に、生きるために、相互扶助を目的とする擬制的家族共同體を形成していた。また、彼らは、本來、このような性格の組織を基盤としながら、權力の側から「博徒」「無賴の徒」と同視され、目の仇にされていたから、集團そのものも、必然的に秘密的であり、現實を否定する反體制（「反清復明」）的であった。張國燾の回憶によると、洪江會は、會黨首領による賭場の開帳を頻繁に行ない、これを利用しながら郷民を會内に吸収し、また、洪江會がこの地域を支配すると、「痞徒」「土匪」の抗争・掠奪事件はなくなったという。たしかに、彼らは、賭博などのように、一般の民衆の生活と敵對する行為に従事することが多かったが、一面では、江西・湖南の交界地域、いわゆる、權力支配の行き届かぬ所で、外來、または、土着の無賴漢による暴力・掠奪から、一般の郷民を守る役目を果たした。また、彼らは、互いに極貧の生活に甘んじてきたがゆえ、任俠的な關係で強く結ばれ、「打富濟貧」をスローガンにしていた。

つぎに、洪江會の最高指令官龔春臺の生いたちをみてみよう。自らは張章年と號し、出身地は瀏陽とも、湘潭ともいわれる。「人と為りは豪俠にして義氣を重んずる」任俠肌の男であった。その前歴は定かではないが、爆竹工出身で、その

後軍隊にはいり、そのなかで、「反清復明」の志を抱き、哥老會に加入したという。馬福益の腹心として、その行動をともし、馬福益なきあと、瀏陽哥老會の首領の地位につき、馬福益の復仇のために、積極的な組織活動を展開した。この活動のなかで、革命派の魏宗銓・蔡紹南と友好を深め、彼らの啓蒙を受けて、滿洲王朝打倒の革命機關「洪江會」を設立し、その領袖となった。また、革命派の助言を受けながら、蜂起にむけて綿密な準備をすすめ、他の會黨の指導と啓蒙にもあたった。蜂起に際しては、同盟會の綱領に類似した檄文を自己の名で散布し、それを旗印に果敢な行動を展開した。

筆者は、この龔春臺の行動の中に、革命派の呼びかけにこたえ、革命派とともにその綱領にしたがって行動した、新しい型の會黨首領、すなわち、革命的會黨首領の姿を見い出せると考える。革命的會黨首領の先驅的役割を擔ったのは馬福益であろう。前項でみたように、黃興らの革命派と交流を深める中で、革命運動に心を寄せていった。同仇會の設立はその象徴であろう。馬福益なきあと、革命的會黨首領の精神は、龔春臺に繼承され、萍瀏醴の革命蜂起が彈壓された後は、焦達峯にひきつがれた。彼は、瀏陽に生まれ、哥老會會員であり、同盟會會員であった。彼は、萍瀏醴における革命蜂起の前夜、會黨首領李金奇の腹心として活動した。蜂起失敗後、この地域の會黨を再び「共進會」に組織し、清朝打倒の豫備軍とし、その活動は湖北にまで及んだ。「湖北革命知之錄」によると、彼の活動によって、會黨が日に日にその勢力をもちかえしていったという。こうした背景のもとに、焦達峯は、一九一一（宣統三）年の武昌蜂起に呼應し、湖南光復の立役者となった。湖南の獨立が宣せられると、この地の會黨は、今日から我々の天下になったと歡呼し、續々と長沙に集まり、その數は三日間で六萬人に達したという。こうした革命的會黨首領の存在が、同盟會の指導力不足を補う役割を擔ったとはいえないだろうか。

洪江會は、基本部隊となった會黨の他に、農民はもちろんのこと、萍鄉では炭鑛労働者、醴陵では陶磁器労働者・兵士など多數を含んでいた。彼らを組織するのに重要な役割を果たしたのは、もちろん會黨であった。それは、「安源の炭坑は會匪の巢窟である」とか、「瀉山の陶磁器労働者の會匪にはいるもの多し」とか、「長沙の新軍は、近頃會匪が多くあま

り頼りにならない」とか、「哥老會匪・排滿革命匪の巡防營・常備軍中に潛入するもの多し」など、地方高官の報告に端的に示される。

ところで、洪江會の擔い手は何であつたろうか。すでに第一章で一般的な説明を終っているが、さらに深く検討してみよう。湖南・江西の交界地域は、起伏に富んだ丘陵地帯で、土地の利用度・生産性は比較的高かつた。民國元年の醴陵では、農民の八〇%が佃戸で、地主的土地所有が壓倒的に優勢であつた。農民の多くは、これら地主の佃戸として米作を主とする農業生産に従事していた。この地域はまた、商業活動が活發で、早くから貨幣經濟の波にあらわれていた。それゆえ、彼ら貧農は、地主・地方政府・高利貸商人などによって、さんざん搾取・收奪され、米の生産だけでは再生産が維持できず、現金獲得のために、副業として、豆・野菜・果樹の栽培、牛・山羊・豚の飼育、陶磁器の繪付けなどに従事した。それでも食えないために、水夫・「負販挑夫」（かつぎ屋）となるものも多かつた。しかし、彼らとて、その仕事で安心できる収入源ではなかつた。外國船の往來、鐵道の敷設によって、水夫やかつぎ屋はその働き場所をせめられ、失業に追いこまれていった。また、江西・湖南の省境を南北に走る羅霄山脈沿いには、古くから多くの小炭坑があり、近年には、ドイツ系資本による近代的な炭礦が安源にできたことによって、農業で生活を維持できない民衆の多くがここに集まり、「礦工」「煤工」「窿工」といわれる炭礦労働者として、その生産に従事していた。彼らは、ともに「下流の輩」といわれ、失業農民・貧民のなれのはてであつた。とにかく、このように米産以外の労働に依存しなければならぬ貧農が多く存在し、この層が「洪江會」の基盤であつた。

ただ、この集團の主體が、農民であつたか、遊民であつたかについては議論の餘地があるが、明確に區分すること自體が誤りであり、いかなる性格の集團であつたとしても、それは、地續きの農民や民衆組織と深く關連をもつものであることを考慮しなければならない。清朝側の史料に、「鄉民は、平日は謀反を公言して憚ることなく、兵が來ると散じて民となり、兵が去るとまた集まって匪となる」との報告がしばしば見受けられる。これは、この集團の活動が鄉村の民衆と強

いつながりの中で営まれたことを示している。

それでは、蜂起軍はどのような行動を展開したのであろうか。彼らは、「剷富濟貧（富者を剷り貧者を濟す）」（「打富濟貧」「剷富濟貧」）のスローガンのもとに一連の行動を展開した。萍鄉縣上栗・桐木では、口々に「復仇」を叫んで、紳士の屋敷を襲って火をつけ、武器・財物を掠奪し、瀏陽縣南郷では、自警團本部・商家を襲撃、萬載縣慈化では、火を放って掠奪し、自警團員を殺害した。この種の表現は枚舉にいとまがない。その行動は、彼らが官僚・郷紳・富商の壓迫・收奪に苦しんできたがゆえに、ややもすれば、反社會的で激しい掠奪を伴ったが、それは、かなり一貫した階級的なものであった。彼らは、どこの地域でも、民衆を搾取・支配した地方の官府・富豪を襲って食糧・財貨を奪い、貧民に分配した。

特に、彼らを暴力的に支配した自警團やその指導者には激しい敵意を燃やし、彼らへの攻撃はすさまじかった。この蜂起の間に、こうして殺害された紳士は数えきれないほどであった。しかし、蜂起軍が一般の郷民を襲うことはまれであり、節度と規律ある行動を展開した。彼らは、姦淫を嚴に戒め、穀物・武器・布疋以外のものを強奪することを禁じたり、滿洲人の奴隸となっている官僚・富商を除いた商工農民を保護する政策などをもち、かなり、整然とした占領地支配を展開した。こうした集團であるがゆえに、彼らは、各地の郷民に同情と支援をもって迎えられた。

また、彼らは「掃清保洋（清朝を倒し外國人を保護する）」のスローガンを掲げて行動した。その一つ「掃清」は、先に述べた「剷富濟貧」の行動の必然的な結果であったが、その内容は、洪江會最高指令官龔春臺が散布した檄文の中で深められている。檄文に曰く、「韃虜を驅除し、少數の異民族にその權利をほしいままにさせないばかりでなく、數千年來の專制政體を打破し、君主一人だけに特權を享受させない。必ず共和國を建て、四億の同胞とともに平等の利益と自由の幸福を享受するようにする」と。すなわち、滿洲王朝打倒の方向性と共和國建設の展望が、はっきりとこれに示されたことである。したがって、これは、いままでの會黨の傳統的な宗旨「反清復明」の枠をのりこえる内容をもつものといえる（當然、それは、同盟會の政治綱領が反映された結果ではあるが）。それでは、帝國主義諸列強にはどう對處したのであ

うか。檄文には、「外國人の生命財産および教會の保護（保洋）」が唱えられ、史料の中でも、排外・仇教的な行動は全く記されておらず、この蜂起軍が諸列強にその矛先をむけていなかったことを示している。しかし、この蜂起がまぎれもなく半植民地下における蜂起であったことは、列強の動きに餘すところなく示されている。蜂起がおこるや、安源炭鑛に利害をもつドイツ、日本、アメリカ、イギリスは軍艦を漢口・岳州に集結し、その大砲の先は蜂起軍のすべての行動にむけられていたのである。なぜなら、諸列強は、蜂起軍のもたらす混亂によって、自國の權益がおびやかされ、また、それによって自國の行動が制約されることを恐れたからであった。ところで、この「保洋」のスローガンは、當時の革命派が義和團運動の敗北から學んだものであり、これがこの蜂起にも色濃く反映されている。つまり、この蜂起軍は、政策の面では同盟會の綱領に大きく依存していたことを示している。この點において、この蜂起が、從來の蜂起とは違った様相をもつものであったといえよう。

### 三 萍瀏醴における革命蜂起

#### (1) 蜂起の前夜

當時、この湖南・江西の交界地域は、兩江總督端方が認めるように、「近來、米穀の價格が騰貴して生活できず、人心は浮動し、遊民・無賴漢がこの間をしばしば往來する」所であった。それだけに、「洪江會」が成立すると、これに結集する民衆は多く、その勢いは、またたくまに、瀏陽・醴陵・萍鄉はもちろんのこと、隣接する宜春・萬載・分宜などの諸縣にまで波及し、<sup>(6)</sup> 盛時には、その數十餘萬を數えたといふ。

洪江會のこうした發展を背景に、七月末、洪江會最高指令官龔春臺は、蔡紹南らの革命派と各方面指揮官を萍鄉縣上栗に近い慧歷寺に集め、具體的な蜂起の準備計畫を協議した。<sup>(6)</sup> そこで、武器・火藥の製造、資金の調達、組織の擴大、他の革命機關との連絡方法などについて検討したが、蜂起する日時や方法は決定せず、同盟會の指示をあおぐことにした。<sup>(6)</sup>

各方面指揮官は、蜂起にむけて着々と準備を進めた。安源の會黨首領蕭克昌は、六千人に及ぶ炭鑛労働者をその支配下におさめながら、湖南・江西の交界地域を自由自在に活動した。ある時には、安源炭鑛を警備する吉安巡防營の營内に潛入し、ある時には、瀋山の陶磁器生産地にはいりこみ、また、瀏陽・醴陵の會黨首領らと手を組んで、洪江會の會員證（票布）を散賣して組織を擴大した。こうした洪江會の活發な活動は、鄉村に「洪江會即日起義」とか、「割富濟貧」とかの謠言を生み、萍鄉・瀏陽・醴陵の官紳を震え上がらせ、各知縣は「會匪」の動きに嚴しい監視の目をむけた。

十月二日中秋節の前後、洪江會本部のある麻石で、恒例の祭禮があり、毎日數千の民衆が集まった。この時、洪江會が麻石で蜂起するとの噂が流れた。これを聞いた瀏陽知縣は、十月七日、巡防營・自警團をして麻石を急襲させ、祭に集まった民衆を四散させるとともに、「會匪」の討伐を行なった。その結果、麻石一帯を統管する洪江會第三方面指揮官李金奇は、清兵に追われ、その途中、白兔潭（醴陵）で河に落ちて溺死した。これが麻石事件といわれるものである。

洪江會首腦の一人李金奇の死は、洪江會内にいつ蜂起するののかとの聲を高めさせた。洪江會本部は、ついに、舊曆十二月末官廳御用納め（封印）の時期に、一軍は安源、二軍は瀏陽・醴陵、三軍は萬載・宜春をそれぞれ據點に蜂起することを決定した。

一方、この地の官紳は、麻石事件を契機に、洪江會の活動に相次ぐ攻撃を加えた。十月二十一日、故李金奇の腹心張折卿が醴陵で捕縛され處刑された。十月二十六日重陽節に、故李金奇の追悼會が栗江書院（上栗）で秘密裡に行なわれたが露見し、主宰者の洪江會首腦許學生（魏宗銓の同胞）が殺害された。ついで、萍鄉縣北部の鄉村では、自警團による「會匪」の掃討が進められた。十月三十日、知縣は、萬載の會黨首領孫紹山（故李金奇の後繼者）が萍實里で秘密會合を開いているとの情報、ならびに、會黨首領崔樹都（桐木方面指揮官）が彼の店内（桐木）に「匪徒」百數十人をかくまっているとの情報を得て、それらを襲ったが、すでに逃亡したあとだった。結局、洪江會の首領名簿の一部と會員證を押収したにとどまった。知縣は、當地の郷紳とともに、名簿を手がかりに首領の行方を追求し、疑わしい郷民を捕えては訊問、ま



た、「誘脅」されて洪江會に入會した者に對しては、會員證をもつて自首するなら免罪するとの告示を出した。さらに、知縣は、縣北一帯での「會匪」掃討作戰を全縣下に展開し、また、醴陵・瀏陽の知縣と會合、界域にこだわることなく共同して「會匪」を排除することにした。

こうした官紳による會黨の彈壓は、萍鄉の洪江會に動搖を與えた。安源の蕭克昌は、部下を洪江會本部に派遣し、蜂起の日程（舊曆十二月末）を繰り上げるように要請する一方、安源炭鑛警備隊の武器・彈藥を奪い、萍鄉縣城を占領する準備をはじめた。また、彼は、瀏陽の會黨首領姜守旦に對し、瀏陽縣城を占領し、その後一緒に長沙省城を攻撃しようと呼びかけた。蕭克昌によるこの性急な動きに對し、洪江會本部は、内外の準備がまだ整っていないから、輕率な行動を慎しむようにと警告した。

醴陵知縣もまた、十一月二十日、「會匪」の取締りを行なうことを言明、ただちに巡防營・自警團による鄉村の戸口調査を實施し、また、洪江會加入者には自首するよう勸告した。こうした官紳の攻撃の前に、醴陵・瀏陽の洪江會でも、蜂起を早めようとする動きが活發になった。しかし、それは相次いで當局に露見し、洪江會は窮地にたった。

十一月中頃、瀏陽の會黨首領王永求らの一團は、瀏陽東北部（張棟坊）に集まり、十一月二十九日を期して蜂起する準備をしていたが探知され、主謀者が捕えられた他、火藥・外國製の銃・會員證・制服などが押収された。同じ頃、瀏陽の會黨首領姜守旦は、瀏陽縣城を占據しようとしたが、これもまた、事前に漏れ、その山寨が急襲された。十一月二十七日、醴陵の會黨首領殷子奇は、部下を安源の蕭克昌のもとに送り、十二月二十二日を期して醴陵縣城を両面から攻撃しようともちかけたが、蕭克昌は、萍鄉・瀏陽・醴陵全域の警備が強化されたのを理由に、その要請をこわった。十一月二十九日、瀋山で、洪江會に加入している陶磁器労働者が蜂起した。當地からの報告によると、彼らは、安源の炭鑛労働者と合流し、十一月三十日夜、醴陵縣城を攻撃することだった。あわてた知縣は、瀋山に巡防營の兵卒數十名を派遣して鎮壓させる一方、安源炭鑛および鐵道局に對し、汽車を止めて車内を嚴重に検査し、安源の「會匪」が醴陵縣城にむか

うのを阻止するよう要請した。十二月三日、醴陵知縣は、在地の紳士より、「會匪」が縣城北西の鄧家渡・板杉舖で毎夜密會し、旗幟・刀劍・制服などをつくっている模様だとの報告を受けた。知縣は、その據點劉正壽鐵店（鄧家渡）を急襲、主謀者の羅良初を捕縛し、武器・旗など多數を押収した。羅良初の自白から、洪江會が十二月五日蜂起することを知った知縣は、縣下に戒嚴令を布き、縣城内のすべての飯屋・煙館などの營業を停止させ、洪江會加入者には、自首すれば罪過を不問に付し、身の安全を保障するとのふれ文を出した。また、鐵道局には、一般の乗客を乗せないように要請、安源炭礦にも安源を固く防備するよう打電した。この警備體制は、まもなく萍鄉・瀏陽・醴陵全域に及んだ。

洪江會本部は、十二月三日夜、醴陵の會黨首領羅良初が逮捕されるや、ただちに高家臺に各方面指揮官を集め對策を協議した。特に、いつ蜂起するのかをめぐって激論が交された。廖叔保・沈益古・饒有壽らの會黨首領は、十萬に及ぶ仲間がいること、清軍の防備體制がまだ整っていないことから、今蜂起するべきだと論じた。一方、最高指令官龔春臺および革命派の蔡紹南・魏宗銓らは、武器・彈藥の不足、外部との連絡援助が不充分であるなどの理由から、蜂起をしばらく延期することを主張した。兩論が對立し、なかなか決着がつかなかった。十二月四日未明、廖叔保は、即刻蜂起するべきだとして退席、麻石で「大漢」の旗を掲げて部下數千人とともに蜂起した。一會黨首領の一方的な實力行動の前に、洪江會首腦は、やむなく蜂起を決意し、洪江會最高指令官龔春臺の名で、各方面に一齊蜂起を指示した。こうして萍瀏醴の革命蜂起がはじまった。

## (2) 起義の展開とその敗北

洪江會本部は、龔春臺を都督とする「中華國民軍」を麻石に編成し、魏宗銓を右衛都統領錢庫都糧司、蔡紹南を左衛都統領文案司、廖叔保を前營統帶、沈益古を後營統帶に任じた。蜂起が宣せられるや、各地の洪江會は相次いでこれに呼應し、龔春臺の指揮下にはいった。兩江總督端方は、この模様について「湖南・江西の邊境では、不逞の輩が叫號付和し、

一時、この一帯は、到る處皆匪となり、友は友を呼び、その數は數萬といわれる<sup>1009</sup>と報告している。彼らは、頭を白い布でおおい、背に「漢勇」「大漢」などと書かれた白い服（號衣）を着、手に手に「後營」「洪軍」「官逼民反」「滅滿興漢」「革命先鋒隊」と記された大小の白い旗を持って集まった。なかには、丸太棒、竹の竿、鋤、鍬、また、自警團から奪った刀劍・火繩銃・鳥銃・ピストル・ライフル銃・モーゼル銃などの武器を手にするものもいた。<sup>1008</sup>龔春臺らの蜂起軍は、麻石・高家臺から上栗方面に進軍、十二月六日、上栗の民衆が爆竹を鳴らして歓迎するうちに、難なく上栗一帯を占領した。この知らせは、各地の洪江會の蜂起を活發にした。

瀏陽では、十二月五、六日にかけて、南部の會黨數千人が白頭巾をかぶり、白旗を立てて、「復仇」「剷富濟民」「掃清保洋」などを口々に叫んで金剛頭を占領、さらに三口・永和一帯に進み、王某・黃某ら紳士の邸宅數十件に火を放ち、自警團の武器・穀物を掠奪、また、それを指揮していた李得中自警團長ら多數を殺害した。<sup>1009</sup>東北部では、洪福會の首領姜守旦が龔春臺の呼びかけに應じ、十二月五日配下を率いて蜂起した。しかし、彼は自軍を「新中華大帝國南部起義恢復軍」と稱し、獨自の檄文を散布しながら、單獨で瀏陽縣城の攻撃に向い、龔春臺の「中華國民軍」による上栗占領に加わらなかった。<sup>1009</sup>

醴陵では、會黨首領李香閣が、龔都督の意を受けて、神福・官寮などを據點に三軍團（總勢一萬）を編成、十二月六日を期して醴陵縣城を奪取する準備をはじめた。<sup>1110</sup>

萍鄉では、上栗周邊の會黨が龔春臺の軍に合流した。しかし、大勢力をもつ安源の洪江會は沈黙したままであった。それは、麻石事件以來、縣當局が安源の「會匪」とりわけ、首領蕭克昌の行動に目を光らせていたからである。<sup>1111</sup>

ところで、安源炭鑛は、この一、二年來當局にとって不隱きわまりない地であった。一九〇五（光緒三十一年）年五月、未拂い賃金の支拂いを要求して労働者が蜂起し、炭鑛の管理事務所・職員の家敷・外人の館が襲撃される事件があり、<sup>1112</sup>一九〇六（光緒三十二年）年六月にも、三班生産制が二班生産制に改められて労働が強化されたことに抗議し、労働者のスト

ライキがおこった。<sup>113</sup>當局は、武力でこれを彈壓したものの、再發の不安におののき、厳しい監視を續けた。

洪江會が麻石に蜂起したとの報告を受けた萍鄉知縣は、安源炭鑛の勞働者がこれに呼應することを憂慮し、江西巡撫・兩江總督に安源の警備の強化と上栗を占領している「匪徒」鎮壓のために援軍の派遣を要請した。<sup>114</sup>また、盛宣懷も蜂起の動向に注目し、特に、外國の借款によって建設された鑛山・鐵道が「匪衆」に破壊されることを危懼し、何はともあれ、安源だけは防守せよと訴えた。<sup>115</sup>

一方、蕭克昌は、洪江會本部および他の會黨首領から、蜂起に呼應せよと再三求められたが、安源の厳しい警戒のために、容易に決起することができずにいた。しかし、龔春臺軍による上栗占領の知らせが安源に傳わると、炭鑛勞働者のなかには、炭坑をぬけだし、蜂起に参加するものもいた。知縣の報告によると「炭鑛を辭する者は毎日百をもって數えた」<sup>116</sup>という。

龔春臺の軍は、上栗に入ってから周邊の民衆を吸収し、その數は次第に膨張していった。十二月七日、龔軍は、後營統帶沈益古の部隊六百人を上栗に残し、瀏陽縣城へ向った。すでに、瀏陽では姜守旦軍が縣城奪取の準備を進めていた。期せずして、龔軍が縣城南の金剛頭を、姜軍が縣城北の大溪山寨を、各々據點として兩面から攻撃することになった。

清朝側は、當初蜂起の勢いにおされ、各地で敗走を續けた。上栗では、巡防營が全員戈を交えることなく、龔軍に捕えられたり、醴陵では、鎮壓にむかった兵卒が途中で逃亡したりした。<sup>117</sup>この種のことは各地で頻繁にみられた。萍鄉知縣は、ただちに城内に自警團の總局をつくり百名の團勇を集めたものの、その所持する武器は毀れて使いものにならず、また、各村に自警團をつくろうにも費用がなく、自警團があっても自分の村を防衛するのがやっとのありさまであった。<sup>118</sup>知縣は再度援軍を求めた。十二月八日、吉安巡防營左軍統領袁旦が來萍、その日のうちに、安源駐在の左軍前營管帶胡應龍と營州駐在の左軍後營管帶朱鼎炎とともに、上栗・桐木一帯に行軍した。しかし、すでに、上栗にいた龔軍の主力は瀏陽縣城に進軍していたために、袁旦らは、十二月十日、簡単に上栗周邊の支配權を取り戻した。また、趙春芳・許登雲の巡

防營が宜春縣城から金瑞・慈化（萬載縣）に進駐、上栗方面に矛先をむけた。その結果、「匪巢」であった上栗一帯は、南北から清軍に挾撃され、この地の會黨は四散した。<sup>124</sup>

醴陵知縣も、戒嚴令を布き、洪江會による縣城の奪取に備えた。李香閣を總帥とする三軍は、足並をそろえて行動することができず、巡防營管帶趙春廷・吳廷瑞らの軍にあっけなく打ち破られ、瀏陽方面に敗走した。<sup>121</sup>

萍鄉・醴陵における洪江會の相次ぐ敗北によって、望みは、瀏陽縣城南に陣する龔春臺軍の縣城攻撃にかけられた。十二月八日、龔軍は先制攻撃をかけたが、防備が堅く阻まれた。十一日、再び縣城を攻めたが失敗、翌日清軍の逆襲を受け、龔軍の主力部隊は潰滅した。また、十二月四日、縣城北から攻撃していた姜守旦軍も、清軍の大攻勢の前に、平江縣に敗走、追撃されて全滅した。<sup>122</sup> こうして、安源の全面的な蜂起がないままに、萍鄉・瀏陽・醴陵を舞臺に展開された「洪江會」の蜂起は、清朝の繰り出した五萬に及ぶ軍團の前に鎮壓された。しかし、「匪衆が潰滅した」というものの、その零星の匪徒がまだ鄉村に潛匿している」という端方の報告のように、洪江會が再度結集する火種は存在していた。それゆえ、政府は、そのまま軍隊を湖南・江西の交界地域に駐留させ、「會匪」掃討作戰を三ヶ月にわたって展開した。<sup>124</sup>

### むすびにかえて

以上、筆者は、萍瀏醴における革命蜂起を通して、革命派の工作活動と會黨・農民・労働者の行動の接点となった「洪江會」の活動を明らかにした。

蜂起の経過からもわかるように、この蜂起は、決してゆきあたりばったりのものではなく、蜂起直前まで綿密な計畫にもとづいてなされたものであり、同盟會の革命戦略に大きく規定されていたのである。すでに、反清の行動と政策では、同盟會に依據したことを指摘したが、このように行動の大枠もまた、それに規定され、それによって農民大衆の蜂起は革命的な展望をもちえたのである。では、この蜂起は、同盟會の運動に從屬し、利用されるだけに終わったのかというと決して

てそうではなかった。この蜂起は、同盟會の綱領を掲げる新しい型の會黨、すなわち、革命的會黨を生みだした。彼らの存在は、當時の同盟會の、いわゆる、農民大衆を指導する力の不足を補完する役割を擔った。

また、龔春臺らの蜂起軍は、彼らを抑壓し、吳民族專制王朝を支える官僚・鄉紳・富商を激しく攻撃した。しかも、この蜂起の擔い手は、すでにみたように、半植民地半封建の清朝政權下において必然的に生みだされたものであり、社會的・經濟的・政治的變革を待望してやまない存在であつた。したがって、この地域の會黨・農民大衆は、この蜂起が彈壓された後も、根強く生き残り、湖南の革命政權樹立に貢獻したのである。

## 註

- (1) 『歷史學研究』一八八號。
- (2) 『新民叢報』四年九號。
- (3) 『光緒東華錄』光緒三十二年閏四月二十一日、九月二日、二十一日、十月十六日の條。『時報』光緒三十二年四月二十二日、十月二十八日、十一月十六日(李文治編『中國近代農業史資料』(1)七二五～七三一頁)。
- (4) 『中國近代農業史資料』(1)の揚子江流域六省の歷年災害統計(七二〇～一二二頁)から試算すると、一九〇一(光緒二十七年)年から一九一〇(宣統二年)までの十年間で、一ヶ年あたりの平均災害地域率は、六省全州縣數の40%にあたる。
- (5) 長沙の米價は、以前は石當り千文から三千文だったのが、一九〇六(光緒三十二年)年には四千文以上にはねあがつたという(中國近代農業資料(一)五五九頁)。
- (6) 註(2)に同じ。
- (7) 陳天華『猛回頭』(中國近代史資料叢刊『辛亥革命』(一)一四四頁)。
- (8) 『光緒東華錄』光緒二十七年七月二十五日の條。梁啓超『中國國債史。宣統三年の清朝政府の豫算歲入額は二億九千萬兩であつた(梁啓超『治標財政策』)。
- (9) 梁啓超『中國國債史』。
- (10) 李希經『庚子國變記』(中國近代史資料叢刊『義和團』(一)四〇頁)。
- (11) 『德宗實錄』光緒三十年十月二十二日の條。
- (12) 嚴中平等編『中國近代經濟史統計資料選輯』四一—四六頁。
- (13) 同前書、六四頁。
- (14) 同前書七二—七五頁。
- (15) 楊世驥『辛亥革命前後湖南史事』一一頁、一九頁の統計表。
- (16) 『長沙稅關報告』(安井正太郎編『湖南』)五七—六二頁。
- (17) 同前書、二〇頁。
- (18) 張國燾『我的回憶』(『明報』月刊第三號、一九六六年三月)一〇頁。

- (20) 『醴陵郷土志』(民國十二年)郷鎮。
- (21) 同前書、磁業。熊希齡「湖南熊庶常希齡上前撫端考察醴陵磁業書」(『東方雜誌』第二卷十一號)。醴陵の磁器は實用品としてかなりの販路をもっていた。
- (22) 「江西商人が商業上の勢力を占むるは獨り湖南の各要地のみにあらずして、四川・雲南・貴州の各地に至るも亦大なる取引をなせるは江西人なりと云ふ」(安井編『湖南』四六頁)。「醴陵郷土志」實業、商業。
- (23) 中村義「立憲派の經濟的基礎」(『史潮』六七)。註(1)に同じ。
- (24) この構想は一九〇六(光緒三十二)年十月に具體化され、營業が開始された。新工場の概要は註(1)の書に詳しい。
- (25)(26) 註(1)に同じ。
- (27) 汪文溥「醴陵平匪日記」(『近代史資料』一九五六年四期)六五頁。
- (28)(29)(30) 王天獎「一九世紀下半紀中國の祕密會社」(『歷史研究』一九六三年二期)八六—八八頁。
- (32) 哥老會の發展・役割を述べた論文として、矢澤利彦「長江流域教案の研究」(『近代中國研究』四)、小野信爾・里井彦七郎「十九世紀中國の仇教運動」(『世界の歴史』一一)、酒井忠夫「清末の會黨と民衆」(『歷史教育』三一一二)、渡邊惇「清末哥老會の成立」(『東洋史學論集』八)、北山康夫「祕密結社と辛亥革命」(『歷史研究』一)などがある。
- (33) この理解には註(1)に掲げた書に啓發される所が多かった。
- (34) 王天獎、前掲論文、九三頁。
- (35) 渡邊惇、前掲論文、一七八—一七九頁。
- (36) 英雄會・興漢會の設立。「中國祕密會黨記」(『東方雜誌』第八卷十號)、平山周「支那革命黨及祕密結社」(『日本及日本人』明治四十四年十一月)。
- (37) 菊池貴晴「唐才常の自立軍起義」(『歷史學研究』一七〇號)。
- (38) 劉揆一「黃興傳記」(傳記文學叢刊『黃興評傳』)一八七頁。
- (39) 張難先「黃興傳」(『湖北革命知之錄』)二九八頁。
- (40) 第二章第二項で述べるが、革命的會黨首領の先驅者として位置づけることができる。『馬福益傳』(『革命先烈先進傳』)、張平子「我所知道的馬福益」(『辛亥革命回想錄』二)、『萍鄉革命軍與馬福益』(『新世紀』)。
- (41) 同前書。劉揆一、前掲書。曹亞伯「黃克強長沙革命之失敗」(『武昌革命眞史』)。萬武「策動馬福益起義的經過」(『辛亥革命回憶錄』二)。
- (42) 劉揆一、前掲書、一九二—一九三頁。「劉道一傳」(『革命先烈先進傳』、劉道一は劉揆一の弟である)。劉道一・蔡紹南が湖南に何月に歸國したのは不明であるが、萍鄉知縣の報告(『近代史資料』一九五六年四期、六〇頁)によると、すでに舊曆六月頃、萍鄉・瀏陽・醴陵地區で革命工作活動を展開していた。
- (43) 劉揆一、前掲書、一九三頁。「劉道一傳」(前掲書)三五頁。
- (44) 「萍鄉知縣張之銳和駐萍巡防軍管帶胡應龍稟稿撫文」(『近代史資料』一九五六年四期)六〇頁。
- (45) 「魏宗鈴傳」(『革命先烈先進傳』)、彼の家は代々萍煤を販運し、富一郷に甲たる家柄であったが、科擧を嫌って家を飛びだ

し、しばらく放浪生活をした。この時期に、蔡紹南・龔春臺・沈益古らと交わり、のち明德學堂に學び、黃興・禹之謨らの教化を受けた。

(40) 第二章第二項で詳述する。

(41) 張國燾、前掲書、六頁。

(42) 「魏宗銓傳」「龔春臺傳」(『革命先烈先進傳』)。

(43) 張國燾、前掲書、七頁。

(44) 陳春生「丙午萍醴起義記」(『辛亥革命』二) 四七二頁。

(45) 陳春生、前掲書、四七一頁。「江西巡撫吳重熹致軍機處電」(光緒三十二年十月二十五日)(『辛亥革命』二) 五〇一頁。

(46) 鄧永成「鄧永成回憶錄」(『近代史資料』一九五六年三期) 八

七頁。「魏宗銓傳」(前掲書) 四八頁。

(47) 會黨首領たちの傳記は「龔春臺傳」(前掲書)を除いて他に

なく、以下の人物については、史料に散見する所から考える。

(48) 汪文溥、前掲書、六七頁。

(49) 「江督撫會奏萍鄉革命軍起事情形摺」(『辛亥革命』二) 四

九一—四九二頁。

(50) 註(47)に同じ。

(51) 「龔春臺傳」(前掲書) 八八—九〇頁。

(52) 焦達峯については、「焦大鵬傳」「先兄焦達峯事略」(『革命

先烈先進傳』)、章炳麟「焦達峯傳」(張難先、前掲書)、「湖南

都督焦達峯」(馮自由「革命逸史」二)、閻幼甫「關於焦達峯二

三事」(『辛亥革命回憶錄』二)による。

(53) 共進會については、「共進會始末」(張難先、前掲書)、「共

進會の原起及若干制度」(『近代史資料』一九五六年三期)、「共

進會宣言書」(『近代史資料』一九五七年二期)、「共進會從成立

到武昌起義前夕的活動」(『辛亥革命回憶錄』二)による。

(62) 「共進會始末」(前掲書) 七九頁。

(63) 子虛子「湘事記」(『辛亥革命』六) 一五五頁。文公直「最近

三十年中國軍事史」上、三〇一—三〇二頁。

(64) 汪文溥、前掲書、六五頁。

(65) 同前書、六六頁。

(66) 「端午帥來電」(光緒三十二年十月二十二日)(『愚齋存稿』

卷六九)。

(67) 註(62)に同じ。

(68) 白石博男「清末湖南の農村社會」(『東洋史學論集』六)。

(69) 中村義、前掲論文(『史潮』六七)。

(70) 註(62)に同じ。

(71) 「兩江總督端方郵傳部右侍郎江西巡撫吳重熹致軍機處請代奏

電」(光緒三十二年十一月十九日)(『辛亥革命』二) 五一九頁。

(72) 「萍廠林道電贛撫」(『近代史資料』一九五六一四) 六二頁。

(73) 「萍鄉縣上贛撫電」(『辛亥革命』二) 四八二頁。

(74) 「湖南巡撫岑春煊致軍機處請代奏電」(光緒三十二年十月二十

四日)(『辛亥革命』二) 五〇〇頁。

(75) 陳春生、前掲書、四六七頁。

(76) 同前書、四六四頁。

(77) 宋教仁「我之歷史」三〇〇頁。

(78) 「萍鄉縣稟贛撫電」(『辛亥革命』二) 四八四頁。これによ

ると「該市民驚惶、多燃爆竹相迎」という。

(79) 「中華國民軍起義檄文」(陳春生、前掲書) 四七五—四七



八頁。

010 註60に同じ。

020 「魏宗銓傳」(前掲書)四九頁。

030 鄒永成、前掲書、八九頁。

040 註02に同じ。

050 湖南の革命派は、舊曆十二月末官廳御用納めの折に蜂起する豫定で準備をすすめていた。魏宗銓らは、この時、同盟會本部と蜂起の日程を再検討するため上海に飛んだが、麻石事件がおこったため、連絡の取れないまま湖南にもどった(「魏宗銓傳」)。

060 「湖南巡撫岑春煊致軍機處請代奏電(光緒三十二年十一月十一日)」「辛亥革命」(一)五二五頁。「新授郵傳部右侍郎江西巡撫吳重熹致外務部請代奏電(光緒三十二年十一月十三日)」(同前書)五一七頁。

070 註60に同じ。「龔春臺傳」(前掲書)八九頁。

080 註60に同じ。

090 汪文溥、前掲書、六四頁。

100 鄒永成、前掲書、八八頁。「龔春臺傳」(前掲書)八九頁。

110 註03 註04と同書、五八一六一頁。

120 註00に同じ。

130 汪文溥、前掲書、六五頁。

140 陳春生、前掲書、四六八頁。

150 汪文溥、前掲書、七〇頁。

160 同前書、六六一六七頁。

170 鄒永成、前掲書、八八一九〇頁。「魏宗銓傳」(前掲書)

四九頁。「龔春臺傳」(前掲書)八九頁。

009 註60に同じ。

010 註60に同じ。鄒永成、前掲書、八九頁。

020 註09に同じ。

030 「湖南巡撫岑春煊致軍機處請代奏電(光緒三十二年十月二十九日)」「辛亥革命」(一)五〇六頁。陳春生、前掲書、四七三頁。

040 鄒永成、前掲書、九〇頁。その檄文は陳春生の前掲書(四七八頁)に收められている。

050 汪文溥、前掲書、六八頁。

060 「若蕭(克昌)一動、足覆安源防營、擄快槍下、則醴陵立糜爛。防安源者防蕭克昌而已」(汪文溥、前掲書、六七頁)

070 註03 「葯石軒日記」「近代史資料」一九五八年一期、四一五頁。

080 註60と同書、四九三頁。

090 「寄南昌吳中丞沈方伯(光緒三十二年十月二十六日)」(「愚齋存稿」卷七〇)。

100 「萍鄉知縣張之銳和團防局紳李有如會稟電」(『近代史資料』一九五六—四)六三頁。

110 「萍鄉縣致贛撫電三則」(『辛亥革命』(一)四八四頁)。

120 陳春生、前掲書、四七一頁。

130 「萍鄉團練各紳致鐵路局李藩電」「萍鄉縣上贛撫電」(『辛亥革命』(一)四八一—四八二頁)。

140 陳春生「丙午萍醴起義記」および故宮檔案館「萍瀏醴起義清方檔案」(『辛亥革命』(一))。

150 註60と同書、四九四頁。

160 註02に同じ。